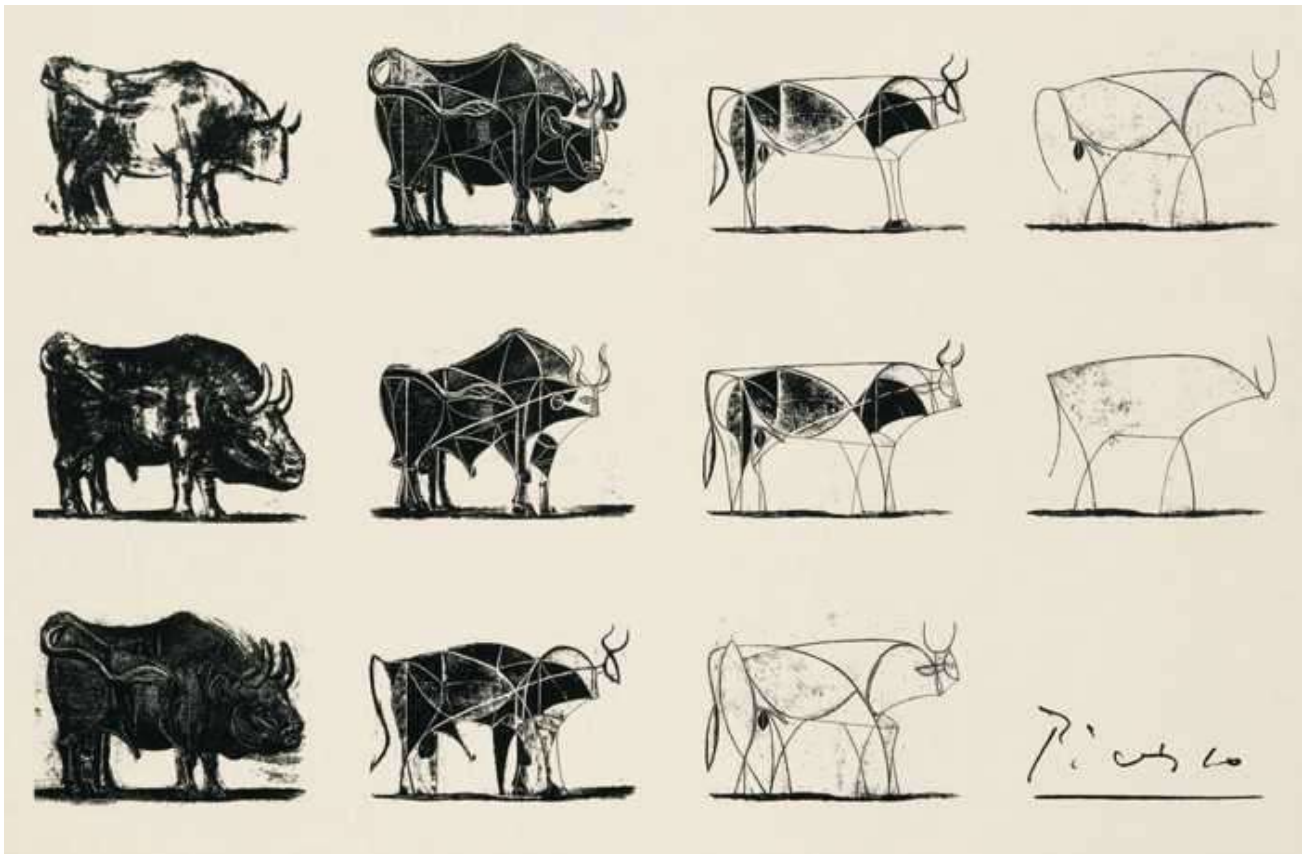

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 107

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 2121. 第13回国際学習科学学会(@ロンドン)での発表受理
- 2122. フローニンゲン大学でのインターン三日目
- 2123. MOOCの撮影現場から
- 2124. フローニンゲンのメディカルセンターにて
- 2125. 感情の変容と時の美的側面
- 2126. 模倣の困難さ
- 2127. 深まりと継続
- 2128. 情報咀嚼の必要性
- 2129. 組織と社会の精神病理の探究に向けて
- 2130. 不気味な夢と近所の騒音
- 2131. 数日前の日記から
- 2132. 「デジタルラーニングと学習環境」の第二回のクラス
- 2133. 間主観的な他者理解を示唆する夢
- 2134. 明日への扉
- 2135. 学びと関与
- 2136. 半記号・半動物
- 2137. 存在の明滅
- 2138. もう一人のインターンと変化について
- 2139. 研究インターン四日目の終了
- 2140. 本日のインターンを振り返って

今朝はいつもより少しばかり遅く起床した。新しい週の始まりと共に、早朝に嬉しい知らせが届いた。今年の五月末にアムステルダムで行われる国際ジャン・ピアジェ学会に引き続き、六月にロンドンで開催される国際学習科学学会での発表が無事に受理されたとの連絡があった。米国時間の12日までに結果の連絡を受けるとのことだったが、欧州時間では12日を迎えた早朝に連絡が入った。

とりあえず、二つの学会で立て続けに発表の機会を得ることができて嬉しく思う。ロンドンでの国際学習科学学会の方は、各発表セッションの応募者が例年の倍以上に及び、とても競争が激しかった。学会の担当者から送られてきたメールによると、論文に関しては長短のセッションを合わせて576の応募があり、ポスタープレゼンテーションには298の応募があり、シンポジウムのセッションには62の応募があったそうだ。

私は、研究アドバイザーのミヒヤエル・ツシオル教授の勧めもあり、短い論文を発表するセッションに応募をした。長い論文のセッションの場合、参加者とのインタラクションが限定的であり、ほとんど意味がないというツシオル教授の助言を受け、より聴衆とのインタラクションが行える短い論文のセッションに応募していた。しかし実際には、私の提出した論文は当初予定していたセッションではなく、ポスタープレゼンテーションの方で発表することになった。

ツシオル教授も今回の学会のレビューアーを務めていたらしく、例年以上の応募者があったという量的な事実のみならず、応募論文の質がどれも高かったという質的な事実があったようだ。そうしたことから、私の論文は結果として希望のセッションで採用されたのではなく、ポスタープレゼンテーションの方に回される形となった。だがこの結果を私は好意的に受け止めている。

少し前にフローニンゲン大学で初めてポスタープレゼンテーションを行った時のことについて日記を書き留めていたように思う。あの時に私は、すでに今回の学会への応募を終えており、ポスタープレゼンテーションの意義についてその時のフローニンゲン大学での発表で初めて実感することになった。実際のところ、ツシオル教授からもポスタープレゼンテーションのセッションに応募を勧められていたのだが、当時の私はポスタープレゼンテーションの意義を理解しておらず、短い論文の発表セッションに応募する意思表示をしていた。結果として今回は、ポスタープレゼンテーションの機

会を得ることができ、当日の発表では、ロンドンで様々な研究者と立ち話をしながら色々なフィードバックと情報を得ることになるだろう。

学会の担当者から今朝方に送られてきたメールを見ると、四人のレビューアーからのコメントが添付されていた。様々な評価項目があるうちの、「専門性に関する知識」は軒並み評価が高いが、他の項目については評価がバラバラであり、全体として辛口のコメントが多い。

六月の学会まで時間が十分にあるため、送られてきたレビューアーのコメントをもとに発表資料を作成していきたいと思う。ロンドンとはこれまで縁があるようで縁がなかったのが、当地での学会発表が今から非常に楽しみである。フローニンゲン:2018/2/12(月)08:46

No.750: Information Digestion

Today is a very beautify day. There are no clouds in the sky.

After lunch, I began to read a couple of articles about digital learning. I just thought that we were caught up in a flood of information that is beyond our capacity to digest. Considering such a situation, I decided to write several times in a day to digest information that I obtain through learning or experience. The number of writing should be more than that of eating in a day.

Groningen, 14:47, Tuesday, 2/13/2018

2122. フローニンゲン大学でのインターン三日目

早朝に雪がぱらつくことがあったが、今はすっかり晴天となっている。フローニンゲンの冬の青空は、本来とても優しい。

早朝の淡い青空を眺めながら、ライフワークについて少しばかり考えていた。結局、それは人生を終える直前まで従事したいと思うものでなければならない、とふと思った。それでは、今自分が従事していることはライフワークの一端を担っているものだろうか、という問いを自分に投げかける。私の回答は肯定的であり、現在日々取り組んでいるほぼ全ての事柄は、それを人生の終焉の瞬間まで従事したいと思うものであるがゆえに、ライフワークの一端を担っていると言える。

もし仮に、今この瞬間、自分のライフワークと呼べるものに従事していないのであれば、日々の仕事は一体何なのだろうか、と思う。各人に与えられた固有のライフワークに則って日々を充実した形で過ごし、ライフワークを通じてこの世界に関与していく生き方を私は肯定しているのだろうし、そうではない生き方を否定しているのかもしれない。とにかく私は、人生を終える最後の瞬間まで従事したいと思うことだけを今この瞬間に行っていく。そのような形でしか生きるつもりはないし、そのようにしか生きられない。

今日はこれから、フローニンゲン大学のMOOCチームとのミーティングに参加する。チームリーダーのトム・スピッツ氏から招待があり、月曜日の朝一番のミーティングに参加することになった。

もうあと少しで自宅を出発する時間となる。今日はそのミーティングに続いて、MOOCの制作現場を見る。具体的には、あるコンテンツの撮影現場を見て、そこでレクチャーをする教授と少しばかり話をする。これまでMOOCの制作現場を見たことがなく、すでに完成したコンテンツ動画を閲覧するだけの立場であったため、こうした機会はとても貴重である。できる限り注意深く観察を行い、数多くの気づきや発見を得る中で疑問点が湧いてきたら、その都度スピッツ氏や制作担当の人に話を伺いたいと思う。

午後からは引き続き、スピッツ氏と行動を共にする。フローニンゲン大学で、MOOCを含めたデジタルラーニングに関する四日間のカンファレンスがあり、その初日の会に参加することになった。これは主に、大学の教職員を対象にしたカンファレンスであり、テクノロジーを活用した学習をいかに推進していくかの意見交換を行う場のようなものである。今日もまた様々な気づきと発見を得る充実した一日になるだろう。フローニンゲン:2018/2/12(月)09:24

No.751: The Power of Human Voice

I changed the instrument mode on the software of a music composition program. The change was from piano to human voice. I thought that it would be better to apply human voice to slow tempo and uncomplicated piece of music. After listening to what I composed with human voice, I realized that the sound of human voice had a unique power; it is sort of a healing power. I'll continue to use human voice for a certain type of music that I compose. Groningen, 21:01, Tuesday, 2/13/2018

今日はフローニンゲン大学での研究インターンの三日目であった。これまでの二日間と異なり、今日は自宅から歩いて30分ほどのザーニクキャンパスのオフィスに行くことはなく、フローニンゲンの街の中心部にあるメインキャンパスに向かった。そこでの目的は、近々世界に配信する新しいMOOCコンテンツの撮影現場を視察することである。フローニンゲン大学のMOOCチームのリーダーであるトム・スピッツ氏に依頼をし、撮影現場にお邪魔させてもらえることになった。

コンテンツは、近年様々な業界で重視されているデータの保護に関するものであり、二人の教授がコンテンツの録画を行う予定になっていた。スピッツ氏との待ち合わせ場所は、二年前にオランダ語の初級コースを履修していたハーモニービルの一階受付前であった。

予定時刻の午前十時前にスピッツ氏がやってきて、そこから一緒に撮影現場に向かった。撮影現場に到着すると、そこには防音装置や特殊な撮影器具が置かれていたが、部屋自体はとてもシンプルに思えた。背景が緑色の壁になっており、背景を緑色にすると、撮影後の編集において文字を書き込みやすいらしい。

二人の教授が到着するまで、撮影担当の女性とスピッツ氏からMOOCの撮影に関してあれこれと話を伺った。私にとって今回が初めての撮影現場の訪問であったため、この機会に様々な質問をした。二人の教授が到着後、立ち位置や自分の体に身につけるマイクの位置を含め、最終打ち合わせを行い、いざ撮影が始まった。

基本的には、二人の教授はカメラの方向に表示される英語のスク립トを読んでいけばいいのだが、実際にそれを噛まずに喋ることは意外と難しいらしく、何度も撮り直しとなった。撮影現場の雰囲気はとても和気あいあいとしており、二人の女性教授は若干ふざけているのではないかというぐらいに撮影を楽しんでいたのが印象に残っている。今回MOOCの撮影現場を見ることによって、撮影方法やその雰囲気については理解できたが、そこからさらにMOOCのコンテンツ開発のプロセスについても理解を深めたいと思う。

コンテンツは基本的に、コースを担当する教授が作り、それをスピッツ氏などの管理部門の人間がコンテンツの文言を含め、品質管理を行うらしい。また資金面に関しても、基本的にはMOOCを提

供しようとする教授が所属する部門が予算を確保し、管理部門に対して費用を支払うことによってMOOCが世に提供されていくとのことである。こうした組織内での予算配分と部門間での資金の授受は、私が大学時代に専攻していた管理会計学の話題であり、昔習得した知識を久しぶりに活用しながらスピッツ氏の話聞いていた。

MOOCの撮影現場に身を置いて、二人の教授が撮影をしている時、ふとその場全体を俯瞰的に眺め、そこにはいない他の協働者の人たちの姿を想像した。私たちがオンラインで受講するMOOCを含め、実際に商品やサービスを享受する際に、そこには目には見えない無数の人たちの仕事が介在していることを改めて思った。

一つの商品やサービスに介在する無数の人たちの仕事。私たちの日常は、目には見えない無数の人たちの仕事の上に成り立っている。

私:「あっ今、“rights”のところを別の単語で発音しましたよ」

そのようにして撮り直しとなった箇所があることを、実際のMOOCの受講者は誰も知り得ないだろう。このように、目には見えないところで様々な人たちが仕事をし、その結果この人間社会が動いているということを改めて実感していた。フローニンゲン:2018/2/12(月)17:17

No.752: Three Types of Cognitive Load

Today is a beautiful day. The sun has been radiating since the early morning.

I participated in the second class about digital learning. I learned the detail of cognitive load theory and five digital learning principles among seven. The cognitive load theory stipulates three types of cognitive loads. One is called intrinsic load, which depends on learners' prior knowledge. Here, a key concept is element interactivity. It means that a task becomes more difficult when task elements are more connected.

The second cognitive load is referred as extraneous load. In general, it is negative and unnecessary for learning. It occurs when learners face redundant material or too much

information. The last cognitive load is called germane load. It is the mental resources for acquiring and automating schemata in long-term memory.

In the today's class, I learned how to design the digital learning environment, considering these three types of cognitive load. Groningen, 15:27, Wednesday, 2/14/2018

2124. フローニンゲンのメディカルセンターにて

フローニンゲンの街の中心部にあるハーモニービルでMOOCの撮影に立ち会った後、MOOCチームのリーダーであるトム・スピッツ氏と少しばかり打ち合わせをしていた。インターン四日目となる金曜日にどのようなことを二人で行うかをその場で少し話していた。

どうやらスピッツ氏は金曜日に双子の息子さんの誕生日を祝うことになっているらしく、金曜日は午後から帰宅するそうだ。そのため、金曜日の午前中にミーティングを行い、研究で用いるデータについて説明を受けることになった。すでに先週の金曜日にエスター・ボウマ博士からデータの保存場所などの説明を受けているのだが、スピッツ氏からも念のため補足説明を受け、データについてはもう説明を受ける必要がないところまで情報を得ておこうと思う。

スピッツ氏との簡単な打ち合わせを終えた後、私はキャンパスを後にし、街の中心部のイタリアンレストランに足を運んだ。普段は外食などほとんどしないのだが、この日は午後からフローニンゲン大学の医学部が主催の、テクノロジーと学習に関するカンファレンスに参加することになっていたため、近くで昼食を済ませる必要があった。

昼食をゆっくりと済ませ、医学部のあるメディカルセンターに向かおうとすると、突然あられ混じりの雪が激しく降り始めた。天から無数のあられのつぶてが降ってきて、地面にパチパチと弾ける音が辺りに響き渡る。そんな中をメディカルセンターに向かって歩いていた。メディカルセンターの前に到着すると、そういえばここは三年前にフローニンゲン大学を下見に来た時に目にしていた場所だということを思い出した。

メディカルセンターとは、日本でいう病院なのだが、建物の中は日本の病院とは雰囲気が随分と異なっている。病院が様々な施設と融合している感じであり、病院内にはレストランや美容院があった

り、噴水があったり、バスケットコートや子供の遊び場などがある。最初センター内に入った時に、ここは一体何の施設なのだろうか？と考えてしまうほどであった。だが、センター内には白衣を着ている人が数多くおり、確かにここは病院なのだということを知る。

病院内でテクノロジーと学習に関するカンファレンスがあるというのも若干慣れない感じがあったが、無事に会議室に到着した。このカンファレンスに参加することになったきっかけは、スピッツ氏からの推薦が一番大きい。テクノロジーを活用した医療教育について関心があったことが挙げられる。

今回のカンファレンスのオーガナイザーの教授に挨拶をし、そこから始まったカンファレンスの中では、随所に私の専門分野と異なる医療分野の話が多く出てきたが、教育という軸は同じであるため、他の研究者の発表に対してあれこれ質問をしながらカンファレンスに関与していった。

参加者は、アイルランド、カナダ、ドイツ、イタリア、スロバキア、オランダと様々な国から来ていたが、人数としては10人に満たないぐらいの少人数で会議が行われた。正直なところ、スピッツ氏からこのカンファレンスについて話を聞いたのは一昨日ぐらいであり、具体的にどのようなことが話し合われるのかあまり理解していない状態でその場に飛び込んでいった。自分の専門分野と全く異なる領域にいきなり飛び込んで、その領域の人たちと対話を行うというような試みを私は時々行うことがあるのだが、果たしてこれが何の役に立つのかは定かではない。ただし、全く土地勘のない土地で人と出会い、そこで何とか意思疎通をしようとする試みは、新たな探究のきっかけの種を植えることにつながっているのかもしれない。

本当に、今日なぜ私が病院に訪れ、その会議に参加していたのかその目的は明確ではない。はたから見れば時間の無駄に思えるかもしれないし、私もそのように思わなくもない。だが人生において、そのように全く未知の世界にずっと飛び込み、そこでしか出会えぬ人たちと交流することにも意味があるのだと思う。

自宅の上空の空に数羽の鳥たちが空を舞っている。彼らは私の知らない土地に向かって飛んでいく。フローニンゲン:2018/2/12(月)17:42

In my understanding, intrinsic cognitive load is basically unchangeable. However, it can be altered by splitting some schemas involving a particular task into small pieces. Of course, we can manipulate extraneous cognitive load by instructional designs.

Again, extraneous cognitive load is unnecessary, as the name of the term implies. Instructional designers have to reduce learners' extraneous cognitive load so that they can have more room for information processing. Ideally, instructional designers should reduce extraneous load and facilitate germane load.

There are various possible ways to do so, for instance, providing additional instruction, reducing task complexity by segmenting the information. I think that keeping the three concepts in mind makes a difference for the effectivity of learning design. Groningen, 15:40, Wednesday, 2/14/2018

2125. 感情の変容と時の美的側面

昨日からまた新しい週が始まった。今週はまた色々と新しいことがありそうな気がする。

一日が終わる際、寂寥感の混じった静謐な感覚がもたらされることが多い。昨夜もそのような感覚がやってきた。寂寥感と静謐感が混じっているのか、それとも寂寥感の後に静謐感が訪れ、寂寥感の残滓が後者の感覚と混じり合っているかのような感覚をもたらすのだろうか。

昨夜は就寝前にあれこれとものと考えており、その中の一つの主題とこのことは関係している。私たちの内側では、ある感情が深まり、別種の質感を持つ感覚に変容することが起こる。例えば、情熱という感情は熱情の質感を帯びるというように。感情の質的変容に関して、私はあることに気づいた。

どうやらある感情は確かに質的変容を遂げていくことに応じて、別種の感情に変容していくのだが、元の感情と新たな感情を大別すると、やはり同種の感情に括られることが多いということである。情熱と熱情は質的に異なるが、種類としては同じであるがゆえに、別種かつ同種の感情だと言える。

しかし、ここでまた一つの気づきを得た。自分自身の体験を振り返ってみた時に、例えば情熱から熱情への変容を遂げた後、熱情はさらに質的変容を進めていくと、静謐な感覚に至ることがわかり始めたのである。

熱情と静謐さは随分と異質な感情であり、それらを同種の感情に括ることはできないだろう。むしろ、それらは対極的な感情であるかのように思える。ある一つの感情は質的深まりと共に、変容プロセスの初期においては、同カテゴリーの異なる質の感情に変容していき、そこから変容が深まると、対極的な質を持つ感情に変貌を遂げていく。そのようなことに昨夜の就寝前に気づいた。

自分の内側にある複数の主題の姿が徐々に見えてきている。上記の感情の質的変容もその一つだろう。そして、欧州での生活を通じて頻繁に考えさせられるのは、「時」という存在について、さらに「時の流れ」に関する事柄である。両者は共に私を捉えて離さない主題の一つであり、欧州で過ごす日々が積み重なることに応じて、時に対する感性が変容している自分に気づく。

流れていく時の中に何かが堆積していくことを明確に知覚している自分がいる。それと同時に、何らの堆積も許さぬ、流れることのない時の流れが存在していることも見え始めている。

流れていく流れと、流れない流れ。流れは流れるし、流れないという二重の性質を持つ。人はもしかすると、そのような特質を持つ流れを流麗だとみなすのかもしれない。

ハッと気づくと、自分が甘美な時の中にあることがある。それは、時の美的な一側面に耽ること、つまり時の流麗な側面に触れていることの証かもしれない。時の美的側面との接触は、日々を充実した形で生きるために必要なのだろう。

今日も一日が静かに動き始める。フローニンゲン:2018/2/13(火)07:06

No.754: Dual Channels

I found an interesting previous study that activating dual channels (e.g., visual + auditory channels) has a better learning effect than using only one channel. The study also shows that visual channel is inferior to other channels in terms of memorization. At a first glance, it sounds like common sense. However, we can easily find examples of learning designs that violate the

principle of dual channels. I'll examine how existing MOOCs apply this concept. Groningen,
16:05, Wednesday, 2/14/2018

2126. 模倣の困難さ

先週末にアーネスト・ベッカーの書籍を読んでいる最中に、心理学者のオットー・ラングの仕事に触れることがあった。ベッカーの書籍に引用されているラングの書籍を調べてみると、いくつか興味深いものが見つかった。中でも、ラングの芸術論に関する書籍は私の関心を強く引いた。芸術とイデオロギーの関係、芸術と社会との関係、そもそも芸術がこの世界に果たす意義と役割は何なのか？という関心が相まって、ラングの芸術論に関する書籍を購入した。

芸術と人間発達についての関心が高まるに依じて、芸術と個人の思想のみならず、集合的な思想との関係性や芸術が持つ社会性について考えを深めていきたいという思いが強くなる。芸術を通じた人間成達は、今の私にとっておそらく最も関心を引くテーマであり、芸術とイデオロギーや社会との関係は切実な関心事項である。それは芸術と人間成達を探究することの意義に関わるものであるし、私自身が一人の表現者として文章や曲を作ることの意義と密接に関わるものである。

昨日は一日中インターンの仕事があったため、日中に作曲実践をすることができなかった。帰宅後、夕食を摂り終えてひと段落してから作曲実践に取り組んだ。昨夜は、バルトークとバッハの曲に範を求めた。ここでまず一つ面白いことに気づいた。バルトークの『マイクロコスモス』は子供やピアノ演奏の初心者に向けて作られたものであるがゆえに、一つ一つの曲に込められた意図というものが今の私にでも比較的明確に分かる。

バルトークが作品に込めた意図を理解しながら自分の曲を作っていくということを行った後、バッハの曲に範を求めた。その時に、確かにバッハが作品に込めた意図が見えることがあるのだが、それはバッハが込めた意図の全体のうちごくごくわずかな部分に過ぎないことに気づく。バッハの曲は、自分の理解を遥かに超えた場所で作られている、ということを切実に感じる。そこから私は、模倣の困難性について考えていた。

「守破離」の思想にあるように、どのような実践においても、優れた先例から型を学んでいくことは重要だろう。まさに今の私は作曲実践に関して、模倣を通じた型の習得に励んでいる段階である。こ

の件をきっかけに、芸術の領域に絞って「模倣」というものについて考えていた。すると、作曲や文学は、一つの曲や一つの文学作品を完全に同一のものとして筆写することができるということにまづ気づく。作曲であれば、譜面に同一の音階の音符を並べていくことが可能であり、文学であれば一字一句同じ文言を書き写すことができる。

思い返してみると、作曲ソフト上にそのような形で完全に一つの曲を再現する形で型を身につけようとしていたことがあり、今では一曲全てではないが、曲の部分に関しては実際に作曲ソフト上で再現をしてみるということを行っている。一曲全体を再現することは、完全な模倣であり、後者に関してはそれが部分ではあっても、部分の完全な模倣である。

文章の執筆においても、そういえば私は一時期、英語と日本語の双方において自らの文体を確立するときに、何人かの執筆家の文章をひたすら手書きで書き写すことを数年間ほど行っていた。ここでも文章を一字一句書き写せば、それは完全な模倣となる。一方で、絵画だけはそうした完全な模倣が不可能なのではないかと思った。

ある作品に範を求めて筆を取り、いざその作品を模倣するために描き始めると、それが完全に元の作品と一致することはないだろう。絵画に関しては、完全なる模倣というものが不可能なのだという事に気づく。それが絵画における模倣の困難さであると思った。そこから私は、作曲や文章の執筆に関する模倣の困難性について考えていた。

確かに、作曲や文章の執筆では上述のように完全なる模倣が可能なのだが、完全なる模倣が可能であるがゆえに、模倣をすることが難しいと思ったのだ。模倣することの意味というのは、型の習得であることを超えて、自分独自の型を構築していくことにあるだろう。自分独自の型を構築していくためには、完全なる模倣ではなく、模倣の最中に自分なりの解釈や工夫を加えていくことが必要となる。

ここ最近作曲実践をしながら感じているのは、自分なりの解釈と工夫を加えて模倣することの困難さである。例えばバッハの曲に範を求めた時、それを見よう見まねで自分なりの解釈と工夫を加えながら曲を作ってみると、まったく異質の曲が生まれてくる。しかもそれは、原曲と比べると、極度に次元の落ちたものだと言わざるをえないだろう。ここに作曲における模倣の難しさが潜んでいるように

思える。どの芸術領域においても模倣しながら型を習得していくことがいかに困難かということを知り、巧みに模倣していくことの道を模索していく必要があると改めて知る。フローニンゲン:2018/2/13 (火)07:39

No.755: Revival of Interest in the Science of Learning

I feel that my interest in the science of learning revived again. While digesting what I learned in the class today, I was sensing intellectual exultation. Scrutinizing the process and mechanism of learning provides me with exuberant feelings. Groningen, 16:12, Wednesday, 2/14/2018

2127. 深まりと継続

今日はとても天気がいい。あいにく今日は外出する予定はないのだが、書斎から穏やかな冬のフローニンゲンの空を眺めることができるのは喜ばしい。今この瞬間の空には雲一つなく、遮るものがない大空を鳥たちが自由に舞っている。その姿は晴れ晴れとしており、実に優雅である。

艶のある日々が続いている。そんなことを数日前にふと思った。

日々が光沢を発しているように知覚されることが最近多くなっている。日々はとても艶かしいのだということに気付けば気付くほど、毎日が充実した形で過ぎていく。

今日は晴天に恵まれているのみならず、一切風が吹いていない。幸いにも、今週末のインターンの日も今日と同じように晴天かつ風のない日となるようである。

昨夜、現在の研究アドバイザーであるミハエル・ツショル教授と昨年の研究アドバイザーであるサスキア・クネン教授にメールをした。二人に報告をしたのは、昨日の早朝に知らされた学会での発表の受理に関することである。学会に提出した論文の第二著者はツショル教授であり、統括的な立場で第三著者になってもらったのはクネン教授だった。そうしたこともあり、二人は論文が採択されたことを喜んでくださった。

私の中でまだ論文を書く意義を絶対的な次元で掴めておらず、自分の内側から溢れ出すような何かを感じていないのだが、それでも科学論文をゆっくりと書き続けていくことが重要であると昨日思っ

た。とにかく書き続けるということ、継続が全てである。中断することなく、兎にも角にも論文を書いているという状態を継続させることが重要だ。その流れを決して途切れさせないようにする。深まりは継続の中からしか生まれないのだから。

膨大な本数の論文を一气呵成に執筆していくのはもう少し先のことになるだろう。それがいつになるのかわからないが、日々の継続の先にそれは必ずやってくると信じている。

今日もこれから科学論文を読み進めていく。論文を読むことが読む目的の中で営まれてはならず、それは論文を書くことを目的とした中で営まれなければならない。読むために文章を読まない。書くために文章を読むこと。それを何よりも肝に銘じて今日もまた自分の仕事に取り組んでいく。フローニンゲン:2018/2/13(火)08:44

No.756: Twilight for Tomorrow

Today has been a wonderful sunny day. The twilight I can see at this moment seems to be a door for tomorrow. Groningen, 17:07, Wednesday, 2/14/2018

2128. 情報咀嚼の必要性

夕暮れ時を迎え、一日の終わりが近づいていることを実感する。今日は本当に天気恵まれており、爽快な冬の青空が一日中広がっていた。

昼食後、近くのスーパーに買い物に行った時、空の青さには思わず息を飲んだ。道中、運河の水が凍っており、アイススケートができるのではないかとと思われるほどであった。そういえば、今どこかの国で冬季五輪が開催されているということを人づてに聞いた。

今、書斎の窓の向こうに様々なグラデーションを持った夕方の空が広がっている。音楽には多様な調というものが存在しており、それは作曲家にとっては音のパレットである。私はまだそれぞれの調が持つ固有の色と質感を正しく理解していない。これから少しずつそれらの色と質感を掴めるようになることを望む。それが可能になれば、今日の前に見える夕暮れ時の空を表現することも、それによって喚起される私自身の感情すらも巧く表現することができるだろう。

昼食を摂り終え、メールを確認すると、研究アドバイザーのミハエル・ツショル教授から、国際学習科学学会に提出した論文の審査が通った旨の連絡に対する返信があった。ツショル教授は今回の論文の共著者であり、多大な支援をしてくれていたため、ツショル教授も今回の結果を喜んでくださっていた。ツショル教授からの依頼もあり、レビュアーのコメントを送り、それに対してツショル教授の考えが即座に送られてきた。本当に研究熱心かつ親身にサポートしてくれる教授である。

明日にはツショル教授が受け持つ「デジタルラーニングと学習環境」のコースの第二回目のクラスがある。第二回目のクラスの課題論文はすでに読み終えており、明日の朝にもう一度読み返す。今日は第五回のクラスで取り上げる三本の論文を読み進めていた。確かにそれらの論文から得るものは少なからずあったのだが、自分の内側を喚起するような大きなものはそれほどなかった。むしろ論文を読んだことによって、何か情報の塊が重く自分の身体にまとわりつくような感覚があった。情報というのは咀嚼することを前提にしていないと、本当に心身に害悪なのではないかと思わされる。

食べ物を咀嚼するのと同様に、情報の咀嚼には一層の注意が必要である。私たちの日常には無数の情報が溢れており、現代社会の仕組みとして、そうした情報は私たちの内側に否が応でも流入してくる。

哲学者の森有正氏はかつて少々手厳しい表現として、「どんな阿呆の内側にも体験は日々蓄積されていく」という言葉を残している。まさに私たちは、社会から流れ込んでくる情報に合わせて、無数の体験情報が流れ込んでくる状況に置かれていることを再認識する必要があるだろう。そうした状況にあって、やはり私たちは、少なくとも一日の食事の回数と同じだけ、あるいはそれ以上に、情報の咀嚼に時間を充てるべきなのではないだろうか。

情報とじっくりと向き合い、それを咀嚼する最良の手段はおそらく文章を執筆することだろう。一日の食事の回数と同じほど文章を執筆することに時間を充ててもいいのではないだろうか。いやむしろ、情報が肥大化するこのような社会に生きているからこそ、情報の咀嚼にはそれくらいのことをすべきだと思う。フローニンゲン:2018/2/13(火) 19:37

No.757: Music of Piercing Wind with Low Sound

It snowed in the early morning, and there is a rain cloud in the sky now.

The outer world seems to play music of piercing wind with low sound. Groningen, 08:37,
Thursday, 2/15/2018

2129. 組織と社会の精神病理の探究に向けて

組織や社会の集合的病理への関心が高まり、明日からはまたアーネスト・ベッカーの書籍に取り掛かろうと思う。具体的には、“The denial of death (1973)”というベッカーの最も有名な書籍に取り掛かる。この書籍との出会いについては先日の日記に書き留めておいた。

本書を手元に置きながら、組織や社会の集合的病理のメカニズムとプロセスを研究している者はいないかを少しばかり調べていた。すると、驚くほどにその数が少ないことに気づく。特に経営学の領域でそうした関心事項を持っている研究者はほとんどいないのではないかとと思われる。それはもしかすると、経営学の分野においては、組織の成長を絶対視する暗黙的な傾向が蔓延しているからなのではないかと思う。

領域を社会学にまで広げられれば、もう少し研究者の数は増えるかもしれない。そうした考えが浮かび、改めて調べ直してみると、幾人か興味深い研究者を発見することができた。その中でもイスラエルのある研究者に関心に向かい、その人物が執筆した“Organizational Pathology: Life and Death of Organizations (2012)”という書籍を購入した。

現在の私は、組織開発に対してどうしても発達科学や教育科学の枠組みから関与することが多いが、それらの領域は組織の病理的側面に踏み込んでいくだけの力がないように思える。それはもちろん、それら二つの学問領域は成長や学習という側面に焦点を当てることを念頭に置いて成立しているから仕方ないと言えは仕方ない。ただし、今の自分の取り組みには、組織や社会の集合的病理に関する知見が不可欠になってきており、事実そうした現象に対する私の関心も高まっている。とりあえず当面は、自分なりに参考文献を見つけながら組織や社会の精神病理について探究を進めていこうと思う。

この点については、以前書き留めていたように、今後はシステム科学やネットワーク科学の観点から組織や社会の精神病理の発生原理や組織や社会の崩壊メカニズムについて探究を進めていく。哲学的な考察と科学的な考察の両方を通じてこの問題に向き合っていく。結局今私が抱える個人

的な種々の問題というのも、それは組織や社会の精神病理と密接に関わっているものであるがゆえに、この現象の探究に駆り立てられているのかもしれない。フローニンゲン:2018/2/13(火)19:57

No.758: After Constant and Diligent Practice

It will take at least three years for me to compose music without referring to previous great composers' works. I thought so last night.

After constant and diligent practice for such a long time, finally I'll be able to compose at will.
Groningen, 05:59, Friday, 2/16/2018

2130. 不気味な夢と近所の騒音

私:「誰？」

という一言を発して、深夜に一度目を覚ました。時刻を確認すると、夜中の二時だった。

あまり思い出したくないような不気味な夢を見ている最中に、自分の部屋のドアを誰かが開けたように錯覚されたため、私は思わず「誰？」という言葉を発していた。目を開けた瞬間に寝室の窓の方を確認すると、窓がふすまに見えて誰かがそこに立っているような感じがした。実際にはそこには誰もおらず、ふすまに見えたものは窓にすぎない。

不気味な夢に起こされてみると、辺りに奇怪な音が小さく鳴り響いていた。何かの機械が小さく動き続けているような音であり、室内の暖房器具から発せられている音かと思ってあれこれ確認した。だが、どうも音の出所は暖房器具ではなく、近所のどこからかであった。その音はそれほど大きくないとはいえ、耳につくとても不快な音であり、再びベッドに横になってもすぐに寝付けなかった。

真夜中の二時に近所の誰かが小さな機械を動かしているとは考えずらかったが、それは確かに近所の家のどこからか聞こえてきた。しばらく寝室で横になっていると、その音がピタリと止まった。やはり近所の誰かがこの時間帯に起きていて、謎の機械を動かしていたようだった。あれは一体どこかの誰の仕業だろうか。

不気味な夢や近所の騒音があったとしても、今朝の目覚めはそれほど悪くなかった。早朝の六時過ぎに起床し、六時半過ぎから一日の活動を開始させた。本日は午前中に日本企業との協働プロジェクトの仕事が一件ある。それを済ませると、「デジタルラーニングと学習環境」のコースの第二回のクラスがある。

初回のクラスの内容はコースの概略と課題の説明についてが主だったので、今日からいよいよ本格的にコースの中身に入っていく。今日のクラスでは、課題書籍に記載されている、デジタルラーニングの七つの原理のうち、五つほどを取り扱う予定になっている。事前に課題図書に目を通し、それらの原理に関する説明を読んだところ、デジタルラーニングの環境を設計する側として非常に参考になることが多かった。これまで自分が提供していたデジタルラーニングを振り返ってみた時、書籍に書かれている原理のうち、随分と多くのものを考慮していなかったことに気づかされる。

これまで自分自身がデジタルラーニングの提供者側であるのと同時に、受講する側に立っていたことがたびたびある。今でも時に、関心領域のMOOCを受講することがあり、そうした時にも薄々学びやすいMOOCとそうではないものがあることに気づいていたが、その要因はコンテンツに対する事前知識やコンテンツの難易度だけではなく、そもそもコンテンツの見せ方とも密接に関係していたのだということを改めて知る。

このコースは期末に筆記試験が課せられるが、それだけではなくペーパーの提出も義務付けられている。それはグループで執筆するものであり、課題の内容は、担当教授がリストアップした既存のデジタルラーニング環境から一つ選び、その環境を七つの原理に基づいて分析していくものだ。七つの原理に照らし合わせて単純に分析するというよりもむしろ、グループで他の論文を見つけてきて、選択したデジタルラーニング環境に対する提言を含めた科学論文を執筆していくことが要求されている。

友人のハーメンの計らいもあり、ハーメンと私はオランダ語のグループではなく、英語のグループを結成することができた。来週に一度グループミーティングを開催しようと思う。フローニンゲン:2018/2/14(水)07:26

Although it was rainy yesterday, it is beautiful weather now. A merciful day also began today.

From now, I'll leave for my internship office. After having a meeting with my supervisor, I'll work on data preparation for conducting data analysis next week. Groningen, 08:42, Friday, 2/16/2018

2131. 数日前の日記から

早朝に数日前に執筆した日記を読み返していた。それらの日記を読むと、欧州生活での二年前に迎えた初めての葛藤の痕跡を見ることができた。とりわけ、科学と芸術の意味と意義、それらがこの社会に果たす役割についての問いは、今でもまだ納得のいく回答を自分の中で持っていない。その問いに対しては、引き続き問い返す必要があるだろう。

問いに答えようとしてはならない。問いに答えようとする形で提示された答えなど、その場しのぎの気休めでしかないのであるから。

問いに答えようとするのではなく、問いかけそのものに応じ、その時に再び問い返すのである。既存の問いに対して新たな問いが投げかけられる時、既存の問いはその内側に含まれている真実を少しばかり見せてくれるだろう。

日記を読み返してみると、その他には、自分の日本語の問題に関する記述があった。精神の未成熟さからもたらされる日本語の質的問題と、日本語で文章を執筆する量の圧倒的な不足についての指摘があった。どちらも本当だろう。自らの精神を観察してみると、その発達は本当に緩やかである。その緩やかさはどうしようもないのだが、発達速度の緩やかさがもたらす日本語の質的変容の遅さを嘆く自分がいるのは確かなようだ。また、日々の日本語を執筆する量が圧倒的に不足しているというのをも得ている。

日々、ある一定程度の文章しか書かないようにしているというのは本当にそうであるし、一方でそれ以上の文章を書けない自分がいるというのも正しい。ある一定程度の分量を超えて書かないようにしていることも、それ以上の分量が書けないことも、単に他の仕事との時間的兼ね合いのみならず、今の自分の精神の成熟度と密接に関係しているだろう。

昨日あたりに、存在の最奥から聞こえてくる声について考えを巡らせていた。そうした声こそが、私自身の真実の声であり、存在の本質から湧き上がる声だと思う。そうした声が自分の内側に存在しているということはすでに明確になっている。あとはその声がどのようにこの世界に発せられるか、そして、どれだけこの世界に発せられるかが重要になるだろう。

現在の気温はマイナス2度とのことである。しかし、今日も爽快な冬の青空が広がっている。穏やかな薄青色の空を眺めていると、本当に心が落ち着いてくる。

一羽の白い鳥が大空を舞い、鳥のお腹に太陽の光が反射していた。その光景はとても美しく思えた。

今日という新たな一日も自分の存在を通して生き切ることになりたい。フローニンゲン:2018/2/14(水)
08:36

No.760: From a Meeting about MOOCs

In the morning, I had a meeting with one of my supervisors. He is a liaison and key person in the MOOC team at RUG. He explained to me about the process of MOOC development. There are mainly three phases: (1) definition phase, (2) design phase, and (3) testing and promotion phase.

In general, it takes nine months from the first phase to the last. Financially speaking, it takes approximately 50,000 EURO to develop a MOOC, although it depends on the characteristics of the MOOC. I then learned the organizational structure of the MOOC team at RUG. There are more stakeholders than I imagined who involve creating a MOOC. Developing a MOOC requires collaboration between various experts.

Though I asked many questions to him, the most interesting topic was the effect of developing a MOOC on instructors. Creating a MOOC requires instructors to reflect on their teaching. Reflection happens to both what they teach and how they teach. Of course, developing a MOOC is laborious, but it provides instructors with a beneficial opportunity to contemplate their

teaching. I discovered a new aspect of MOOC development. Groningen, 10:50, Friday,
2/16/2018

2132.「デジタルラーニングと学習環境」の第二回のクラス

今日は早朝から本当に天気がいい。先ほど、行きつけのチーズ屋から自宅に戻り、今は昼食を摂り終えたところである。

今日は早朝に、「デジタルラーニングと学習環境」のコースの二回目のクラスに参加した。このコースは、私の研究アドバイザーのミハエル・ツショル教授が担当しており、普段の研究ミーティングとはまた違った形でツショル教授から学びを得る機会になっている。

今日のクラスでは、「認知的積載理論」とでも訳されるであろう“Cognitive Load Theory”を中心に、デジタルラーニングを設計する際の七つの原理のうちの五つを扱った。認知的積載理論については、教育科学学科に所属してからよく見聞きする理論であり、実際に最初の学期に履修した「学習理論と教授法」のコースでも学ぶ機会があった。だが、今回はデジタル環境という文脈を特定することによって、デジタルラーニングの設計においていかに学習者の認知的負荷を最適な状態にしていくかについて理解を深めることができた。それらの原理については、今後自分の体験などと照らし合わせながらメモ書きを残しておきたい。

これまでオンラインラーニングを提供する機会が何度もあり、その時の学習デザインを改めて振り返る必要があるだろう。単純な話、デジタルラーニングの環境で、オーディオとイメージ図の組み合わせを用いる場合とテキストとイメージ図の組み合わせを用いる場合とでは、認知的な負荷が随分と異なる。また、イメージ図のどこにどれだけのテキストメッセージを配置するのも認知的な負荷に与える影響が異なってくる。

認知的積載理論では、少なくとも三つの認知的負荷が提唱されており、それらの負荷をどのような量に調節し、三者間をどのようなバランスにするのかを考慮に入れながら学習環境を設計していく必要がある。また、先行研究が示しているように、コンテンツ内容の事前知識の有無とその度合いによって、当然ながら認知的負荷の度合いは異なってくる。そうした点を考慮に入れて学習環境を設計していくという意識が以前の私には随分と希薄であったように思う。

ちょうど最終課題は、既存のデジタルラーニングサービスをケース素材とし、そのケースに対して分析と改善提案をするようなグループ論文を書いていくことになっている。ケースを分析する過程で、今日学習した五つの原理、そして次回のクラスに学習する残り二つの原理に対する理解がより深まっていこう。

現在MOOCに関する研究インターンも同時並行で走っており、対象とするMOOCを研究する際にも、学習デザインの観点からコンテンツを眺めてみることも意識していきたい。とりあえずこれから日課である仮眠を取り、仮眠後に、本日学習した五つの原理について、自らの経験に基づいた自分なりの考えやその適用方法を英文日記の方にまとめておきたい。フローニンゲン:2018/2/14(水)
14:15

No.761: Time-Series Data and Forecasting

I noticed that I could collect ample data sets to apply any nonlinear dynamics methods. Basically, time-series data analysis requires a sufficient amount of data points. Fortunately, I can obtain an enough amount of data to conduct time-series data analysis.

This is not my current research purpose, but I can forecast the trend of the time-series with R. For instance, I can predict the timing of dropout for a MOOC and recommend a remedial action. If I have enough time after I test my original research hypothesis, I will try this forecasting. Groningen, 21:12, Friday, 2/16/2018

2133. 間主観的な他者理解を示唆する夢

今朝は六時前に起床した。起床後、寝室からゆつくりと書斎の方に向かっていくと、窓の向こう側の世界に雪が舞っている光景が目飛び込んできた。今日は朝から雪が降っており、道路にはすでにうっすらと白い雪のパウダーが積もっている。確かに今雪が降っているのだが、意外にも外気はそれほど寒くない。気温は1度ほどであるようだ。おそらく、今は暗闇で全く見えない空上空の世界には、氷点下の世界が広がっているのだろう。

天気予報によれば、今日は早朝の雪がいつしか雨に変わり、その雨が午後の三時あたりまで降るようだ。ちょうど午後三時半からキャンパスでミーティングが行われる予定になっており、その頃には雨が止んでいることを願う。

記憶にある限り、先週か先々週は毎日何かしらの夢を見ていたように思う。一方、ここ数日間は記憶に残る夢をほとんど見ていなかった。さらには、やたらと深夜に一度目を覚ましてしまうという状態が続いていた。目には見えない不安を抱えているとも思えず、何が原因なのだろうか。

今から変えようとは思わないが、今後はベッドの質を変えてみるのも良いかもしれない。ここ最近記憶に残る夢をあまり見ていないと述べたが、今朝方の夢はかすかに記憶に残っている。夢の中で私は、雨の中を学校に向けて歩いていた。三十分ほど歩いたであろうか、学校に着く頃には靴に雨が染み込みつつあり、車で送ってあげるという母の厚意を素直に受け取っていれば良かったと一瞬思った。

どうやら夢の中の私は高校生ぐらいの年齢であるようだ。車で送ってもらうことをしなかったのだが、結局私は学校まで歩くことによって、理由のわからぬ満足感のようなものを感じていた。それは体を動かすことによって得られたものなのか、あるいは別の要因によってもたらされたものなのかはわからない。少しばかり自分の靴に雨が浸み込んでいたことは気がかりだったが、学校に到着する頃には乾いているようだった。

学校に到着すると、何とそこは冬季五輪の会場になっていた。日本人選手団を引っ張っているリーダー格の選手が金メダルを取得したらしい。報道陣がその選手の周りに集まり、インタビューをしている。その選手は、金メダルを取得した直後であるにもかかわらず、興奮した様子は全くなく、非常に冷静にインタビューに答えていた。だが、インタビューの最初からその選手の目には感動の涙が浮かんでいた。私はその場でインタビューの光景を見ていたはずなのだが、いつしかそれがテレビ画面越しに変わった。

テレビ画面の向こう側にその選手がいて、その選手の目に浮かんでいる涙が画面の中で拡大され始めた。その選手の涙を見ると、なぜだかこちらまで感動の涙が込み上げてきた。

「間主観的な他者理解」の姿がそこにあった。ある人の感動が別の人の感動に変移しうること、感動のみならず他の諸々の感情においても、私たちは他者の感情に共鳴しうることの可能性がそこに提示されていた。

インタビューが終わると、その選手はゆっくりと報道陣を後にし、他の日本人選手が待っている方向に向けてゆっくりと歩き出した。その様子をテレビ画面で眺めていると、再びその現場に自分がいることに気づいた。だが、そこには誰もおらず、もうオリンピックなどやっていなかった。一面が雪に覆われた世界だけがそこにあった。フローニンゲン:2018/2/15(木)06:40

No.762: Virtual Currencies and Belonging Needs

In the afternoon, I suddenly came up with the idea that people would purchase and use virtual currencies more often in the near future because of their intrinsic needs to make social bonds. The more people purchase and use virtual currencies, the more they cannot tolerate not possessing and using the currencies. This future social trend might derive from human belonging needs. Groningen, 21:15, Friday, 2/16/2018

2134. 明日への扉

ここ数日間空を見ながら感じていたことを簡単に書き留めておきたい。それらの感覚はその時の自分が確かに生きていたという証であり、同時にそれらの内的現象は今の自分に繋がっているのだから。

先週一週間、もしくは先々週は煌めく星々が夜空に見えるような日々が続いていた。だが、ある日を境にまた雨雲が空一面を覆っているような日があった。雨雲に関しても、その土地の条件が異なるからなのか、日本と欧州の雨雲は色や形が異なるように思える。少なくとも、私が受ける印象は異なっていることは確かだ。

星が見えなくなった夜空を眺めながら、そんな日であっても自分の内側に煌めく星々が存在していることを忘れないようにしたい、という思いを持った。その時の私は、確かに星のような光を発する何かがある自分の内側にあることをはっきりと認識していた。そこから私は、人はそれぞれにそうした星の

ようなものを内側に持っているのみならず、それらはある種の蠱惑的な場所として内面世界に存在しており、それが日々を生きることの充実感をもたらしているように思えたのである。

欧州での生活も残り半年を切り、私は今ある蠱惑的な場所に向かって日々歩みを進めているように思えてならない。当然ながら、それがどのような場所なのか今の私には皆目見当がつかない。だが、そうした場所が確かに存在しており、そこに向かって日々歩みを進めていることは疑いようがない。

昨日の夕方、朝から夕方にかけて本当に天気が恵まれていたことにしみじみとした感慨を受けていた。夕方の空は淡い青色を発しており、相変わらず優しい表情を浮かべている。そうした空の向こう側に、暮れかかる太陽を見た。その瞬間に目に映る黄昏は、明日への扉のように思えた。そして実際に、その扉を開けて、今日という今がここにある。あの夕陽を見たのが昨日のことであったということが幾分信じられない。

欧州で生活を送るに連れて、時間感覚が変容し始めたのみならず、それは記憶の変容すらも促しているかのようだ。時間感覚と記憶がいかように変容しようとも、文章を書くことによって私は今を生きられるような気がしている。存在の足取りを克明に記録していくことが、私にとっては永遠に続く今を生きることを可能にする唯一の方法なのだと思う。フローニンゲン:2018/2/15(木)07:06

No.763: My Role for Organizational Development

My interest in organizational development has recently increased day by day. It may be because I've collaborated with Japanese companies in the last seven years. Perhaps, facilitating organizational development is one of my vocations. Yet, my role to support organizations does not come from the field of business management but derive from any other academic fields such as developmental science, system science, and network science. That would be my unique contribution to the development of organizations.

In parallel with my any other daily activities, I'll continue to explore the processes and mechanisms of development and decay of organizations. Groningen, 21:22, Friday, 2/16/2018

今日は早朝に雪が降り、今は雨雲が空を覆っている。外の世界は低音を伴う鋭い風の音楽を奏でているかのようである。

小雨が降る午前中、今日もある日本企業との協働プロジェクトの仕事を進めていた。昨夜も少しばかり考えていたのだが、組織と協働させていただく時に、成人発達に関する知見を活かしたコンサルタントとしての役割、発達を支援するコーチとしての役割、コンサルティングやコーチングの過程の中で得られた発見事項やデータをもとに実証的な見解を示していくという研究者としての役割が自分の中にあることに気づく。このような形で複数の役割を自己に持たせながら組織開発の支援を行っていくことは、今後も大切にしていきたいことである。

実際に現場の方とコーチングを通じて対話をしてみなければ見えないものがあり、一方で実証的なデータに基づいて分析を行ってみなければ見えないものがある。現場への関与と客観データに基づく俯瞰的な分析の双方によってコンサルティングを進めていくことが自分の特性に合っているだろうし、そのような形でなければ自分は意味のある形で組織に関与できないと思っている。これは私の思い込みなのかもしれないが、断片的な関与ではなく、包括的な関与で組織と向き合っていくことは、今の私が大切にしていることである。

組織への関与の仕方の一つである自分のコーチングについては、その内容と方法を見直す時期にあるかもしれない。昨日も、成長支援を意図したコーチング、プロセスコンサルテーション、アクションリサーチを用いた関与の仕方の三つについてあれこれ考えていた。それぞれの名称が示唆するように、最初のはコーチとしての力量が問われるであろうし、次のはコンサルタントとしての力量が問われる。そして最後のは、研究者としての力量が問われてくる。

今の私は、自分の関心が多岐にわたっているという点のみならず、企業との関与の仕方に関しても複数の領域にまたがるものになっていることを実感する。本当に色々と学ぶことが多い。しかし救いとしては、学ぶことを迫られていることと自分が内発的に学びたいと思っていることが完全に合致していることだろう。

企業社会に何かしらの形で関与し続けていくというのは、自らに課せられた一つの大切な役割のように最近思えてくる。企業社会の精神性や制度、組織と個人の発達に関しては、今後も自分なりの観点で探究を進め、自分なりの方法で関与を継続させていきたいと思う。学びと関与は別個のものではなく、一なるものなのだ。フローニンゲン:2018/2/15(木)10:52

No.764: Toward the Season of Bloom

While going back to my house from the university campus in the evening yesterday, I noticed that the time between sunrise and sunset gradually became long. It foretells that winter ceases to end, and that a new season, in which flowers bloom, will come soon. Groningen, 10:50, Saturday, 2/17/2018

2136. 半記号・半動物

今日も一日が静かに終わりに近づいている。早朝にある考えが浮かび、それについてまた少しばかり思い出している。とても不謹慎かつ単刀直入な言い方かもしれないが、科学論文ばかり読んでいては知力が脆弱になる感がある。もちろん、科学論文を読み進めることによって、ある一定程度まで知力は高まるかもしれないが、それは必ずあるところで止まる。

科学論文を読めば読むほどに、知識の絶対量は増えるが、思考が重たくなる感じがするのはなぜだろうか。こうした思考の鈍重さは、知力の弱体化を予期しているように思える。こうしたことをもたらす背景には、そもそも科学論文の構築のされ方の限界があるだろうし、科学論文の多くはどこか哲学的に対象について考える余地がほとんど残されていないように思えてくる。むしろ多くの論文ジャーナルは、そうした哲学的探究の余地を許さないような論文しか採択していないようにすら思えてくる。

以前、科学論文の採用プロセスの問題点を指摘するような記述をどこかで見かけた。依然として私が科学論文に対して疑義を抱いているのは、論文ジャーナルの政治的な問題や現在の科学論文の限界をよく目にするからだろう。

今日は夕方大学で所用があり、自宅に戻ってきてからは、アーネスト・ベッカーの“The denial of death (1973)”を最初から読み始めた。先日、序文だけに目を通し、今日は本格的に第一章から読み進めた。本書を読み始めてみると、今の私の関心事項に合致しているためか、引き込まれるように第四章まで読み終えた。本書を読みながら、改めて私たち人間は、抽象的なシンボルをいくら扱えるようになって、いつまでたっても結局動物であるということを忘れてはならないと思った。

人間の発達を決して過信してはならない。どれだけ発達しようが、私たちは結局動物の域を出ることはないのだ。この点はまさにエリック・フロムが過去に指摘していたことであり、私たちは半分シンボルで、半分動物であるという事実を忘れてはならないだろう。

私たちは抽象的なシンボルを操作する能力を獲得したことによって、シンボルが持つ永遠性と、自らの存在が動物であるという有限性との間で葛藤を覚えるようになる。私たちの内側に永遠性と有限性の二つが同居していることが諸々の苦しみを生み、実存的なジレンマを生じさせることにつながっているのかもしれない。フローニンゲン:2018/2/15(木) 10:52

No.765: Our Fate

I heard some negative news about virtual currencies. Each news implies the distorted balance between the development in each quadrant (individual and collective interior and exterior quadrants). Needless to say, virtual currencies are the product of highly advanced technologies. Yet, individual maturity toward virtual currencies don't follow the technological development. Also, legal systems are poorly established until now. We must know that our development has always fallen back to technological development forever. Groningen, 13:00, Saturday, 2/17/2018

2137. 存在の明滅

今朝は五時半過ぎに起床し、六時を過ぎた頃に一日の活動を開始させた。今朝は雪は降っておらず、いつものように闇に包まれた静寂さが外の世界に広がっている。

今日は研究インターンの四日目の日であり、起床直後に体を温めるために浴槽に浸かった。湯船から上がり、書斎の窓を開けると、小鳥の鳴く声が聞こえ始めた。今もまだ小鳥はずっと鳴いており、その鳴き声は静寂さに浮かぶ小さな波のようにとっても穏やかだ。

インターン先のオフィスに向けて自宅を九時に出発しようと思う。九時半過ぎから、MOOCチームのリーダーであるトム・スピッツ氏とミーティングをする。今日のミーティングでは、データの保存先を含め、データに関する最終的な説明を受けることになっている。おそらくそのミーティングにはそれほど時間がかからず、長くても一時間弱で終わるだろう。

ミーティング終了後、本日一日をかけてデータの整理を行いたい。具体的には、研究対象としているMOOCのデータのフォーマットを整えていく。これをしなければ、プログラミング言語のRを用いたデータ分析が行えない。先週に作り終えた定量化基準をRを用いて適用するためには、分析対象データの整理が不可欠となる。

今回の研究で私が対象としているのは、MOOCにおける講義のトランスクリプトと学習者のオンラインコメントの二つである。前者に関してもそれなりの分量があるが、後者に関してはさらに分量が多い。ただし、非線形ダイナミクスの手法を活用する際に、豊富な時系列データがあることは理想的である。今日は少なくとも講義のトランスクリプトをエクセルファイルに落とし込み、データの整理を完了させたいと思う。仮にこのタスクが早く終われば、引き続きオンラインコメントに対しても同様のことを行いたい。とりあえずこのデータ整理を来週の月曜日中に終わることができたらと思う。

本日のインターンに向けて文章を書き留めた後、ふと窓の外に再度耳をやると、先ほどの小鳥がまだ鳴いていた。文章を書いている最中には、その小鳥の存在は意識の外にあったのだが、再びその小鳥の存在が意識に上がった。文章を書いている最中にも小鳥は実在していたはずなのだが、それに意識が向かわなかったがゆえに、小鳥は私の意識の世界の中では存在してなかった。これは存在論の古典的なテーマだと思うのだが、この一件は一つの大切なことを私に教えてくれたようだ。

私たちは果たして、日々の瞬刻瞬刻において、自分自身に気づいているだろうか。身体を通じてこの世界に実在していたとしても、仮に私たちが自らの意識上において私たち自身の存在に気づか

ないとき、私たちの存在は無いに等しいものになってしまうのではないだろうか。もし日常において、自らの存在に気付きの意識を当てることがほとんど無いのであれば、それは意識上の世界というこのリアリティにおいて、自己が長らく失われた状態にあることを意味しているように思える。

先ほどの小鳥と同じで、私は常に存在しているように見えながら、実は意識上というこのリアリティに存在していない時間の方が多いのかもしれない。存在はこのような明滅するような性質を持っているのかもしれないということ、そして今この瞬間にこのように文章を書いている時が、自らの存在を強く意識するのだということを改めて知る。フローニンゲン:2018/2/16(金)06:54

No.766: Under the Winter Sky

Being under the winter sky invokes various thoughts and feelings. By the way, I notice that we are always under something beyond us. Groningen, 09:08, Sunday, 2/18/2018

2138. もう一人のインターンと変化について

今日はこれからインターンシップ先のオフィスに向かうが、そういえば、もう一人のインターンとはまだ一度も顔を合わせたことがない。私は月曜日と金曜日にオフィスに行き、彼は水曜日にオフィスに通っているようだ。二人は同じ部屋を共有しているのだが、勤務日が異なるため、これまでまだ一度も顔を合わせたことがないという状況が続いている。しかし、部屋の表札からお互いの名前を知ることが可能である。

もう一人のインターンの名前は、ヴィンセントという。オランダが生んだ偉大な画家、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホと同じファーストネームだ。

インターンの初日に何度か私のオフィスに電話がかかってくるがあった。それらは大抵、学内の関係者からのテクノロジーに関する質問だった。電話をかけてきた者たちは一様に、「ヴィンセントか？今使っている機器に関して質問があるんだが」という切り出し方で会話を始めた。残念ながら私はヴィンセントではないことと彼は水曜日に勤務している旨を伝えると、そこで彼らとの会話は終わりを迎える。そのようなことが勤務初日に何回かあった。そこから私は、ヴィンセントの仕事はテク

ノロジー周りに関することであり、特に情報機器の使い方に関するサポートをすることにあるのではないかと思った。

部屋の表札に掲げられた、「Vincent」と書かれた名前を見るたびに、ゴッホのことを思い出す。そういえばここ最近、ゴッホの日記を読み進めることがなかった。この週末に、久しぶりにゴッホの日記を読みたいと思う。

時刻は七時を迎え、辺りが少しずつ明るくなってきている。気づかないうちに、徐々に日の出の時間が早くなっている。少し前に調べたところ、三月の末には再びサマータイムに入る。サマータイムに向けて、北欧に近いオランダ北部のフローニンゲンも徐々に光の多い世界に向かっていているようだ。

毎朝毎晩、外の景色を眺めることによって、こうした変化を感じるのの一つの楽しみである。変化というのは気づいてあげることが何よりも重要なのだろう。これは季節の変化のみならず、自分自身の変化、そして他者の変化についても当てはまるだろう。変化は気づかれることによって変化となる。

変化前の初期地点を見逃さず、変化の過程をつぶさに観察しながら変化後の姿を見る。そして、それはまた新たな変化に向けて動き出す。内外の現象について、その絶え間ない変化のプロセスを今後も見守り続けていきたいと思う。

そろそろ夜が完全に明け、変化に満ち溢れた新たな一日が始まる。フローニンゲン:2018/2/16(金)
07:20

No.767: Incidental and Purposeful Motifs

The more I compose music, the more ideas of motif I can obtain. Whenever I create music referred to great composers' works, I almost always feel struck by their ideas and my incidental motifs. I cannot still create motifs at will, but continuous practice would definitely enable me to do so. Serendipitous motifs created through diligent practice beget purposeful motifs. Groningen,
15:44, Sunday, 2/18/2018

フローニンゲン大学でのインターンの四日目を終えた。今日は午前中に、MOOCチームのリーダーであるトム・スピッツ氏とのミーティングを終えた後に、そこからは研究データの整理に着手した。

早朝に確認した予定では、今日は研究に用いるデータのうち、対象とするMOOCの講義ビデオのトランスクリプトのデータを全て整理しようと思っていた。手元にあるcsvファイルのフォーマットは非常に乱れており、それを修正していくよりも、一つ一つのトランスクリプトをエクセルファイルに移していく、その後にcsvファイルを作成する方が早いと予想していた。さらには、こうした作業が手間のように思えても、実際にトランスクリプトを一つ一つエクセルに移していく過程の中で、対象とするMOOCのコンテンツの中身をより理解できるという副次的効果もあると見込んでいた。

昼食前から実際にデータ整理に取り掛かってみると、確かに一つ一つのトランスクリプトを移していく過程の中で、コンテンツの理解は深まっていったように思う。当初の私の計画では、今日中に対象としているコースの全七週間分の講義データをエクセルに移すことを目標にしていたのだが、実際にそれをやってみると、データの量が思っていた以上に膨大であり、結局全てを終えることはできなかった。

昼食前から勤務時間の終わりまでの時間を使っても、七週間のうちの半分のデータを移すことで精一杯であった。必然的にこの作業は来週の月曜日に持ち越すことになった。しかしよくよく考えると、時系列データが膨大にあるというのは、私の研究にとっては嬉しいことである。というのも、今回の研究で用いる非線形ダイナミクスの手法は、ある一定量以上の時系列データを要求しているからである。

今日は対象としているコースの講義トランスクリプトを一週間分移すたびに、どれくらいのデータポイントがあるかを確認していた。すると、毎週の講義に関して平均300以上のデータポイントがある。これは、昨年私が行っていたオンライン学習の研究時のデータ量を遥かに凌ぐものであり、今回の研究で用いる予定のトレンド除去変動解析の手法を活用するには十分である。今日は合計で1200個ほどのデータを取得した。

来週の月曜日にデータの整理を終えたら、早速データ解析を行っていく。すでに研究仮説は十分に立てており、それを一つ一つ検証していく。そのためには、整理されたデータをR上で分析していく必要があり、金曜日からはRのプログラミングコードを書くことに力を入れることになるだろう。

今日も昼食を大学の敷地内にあるスーパーで購入するためにキャンパス内を歩いている時、プログラミングコードを書くことと作曲することの間に共通性を見出している自分がいた。この点については以前の日記で何度か書き留めているが、私にとっては、プログラミングコードを書くことも作曲することも、どちらも創造の喜びが伴うことに変わりはない。片方はコンピューター言語であり、もう片方は音楽言語だ。自然言語ではない他の言語を用いた記号創造には独特の喜びがある。

来週の月曜日にデータの整理を無事に終えたら、そこからはプログラミング言語を通じた創造の喜びを感じられるようになるだろう。フローニンゲン:2018/2/16(金) 21:41

No.768: Time and Death

Interestingly enough, I realized that only our conscious self knows time and death but our unconsciousness doesn't. Does it imply time and death are both real and unreal? Groningen, 18:20, Sunday, 2/18/2018

2140. 本日のインターンを振り返って

本日より、インターン先の私のオフィスの隣の部屋の教授が海外から帰ってきた。早朝に私がオフィスに到着した時、隣の部屋にいる教授はすでに仕事を始めており、電話の最中だった。開かれたドア越しに、教授と私は手を上げて挨拶を交わした。その後、午後までずっとその教授は会議に参加しているのか何かでオフィスを離れていた。

昼食後、データの整理に取り掛かっていると、その教授がわざわざ私の部屋までやってきて挨拶をしに来てくれた。こちらから挨拶をしに行こうと思っていたのだが、データの整理に集中しており、その教授が部屋に戻ってきたことに気づくことはなかった。

隣の部屋で働いている教授のファーストネームはハンスという。ラストネームを聞くことはなく、隣の部屋の表札を見ることはなかったので、ハンスの苗字はまだわからない。だが、挨拶を交わした限り

ではとても人の良さそうなオランダ人だ。彼とは一緒に働くことはないであろうが、お互いが気持ちよく働くためにはご近所の人付き合いは大事であろう。

データの整理に没頭し、少し休憩を入れようと思うたびごとに、私はオフィスの窓越しから見えるサッカーコート眺めていた。オフィスの窓は、自宅の書斎の窓と同じくらいか、それ以上に開放的である。そのため、オフィスからの見晴らしはとても良い。外は相変わらず寒いのだが、冬の午後の太陽がサッカーコートに降り注ぎ、緑の芝生が輝いていた。

今日は早朝に、もう一人のインターンであるヴィンセントについて日記を書いていたように思う。ゴッホと同じファーストネームを持つ彼とまだ一度も会っていない。今日も彼宛に二件ほど電話があった。私は電話を受け取るたびに、「ヴィンセントは今日はいません。彼は水曜日にオフィスにいます」と伝えた。

一応彼らの要件を聞くと、大抵電子機器に関するテクニカルサポートの依頼だった。ヴィンセントは私よりも随分と前からインターンとして働いているようであり、テクニカルサポートに関して随分と学内の関係者に頼られているのだな、と実感した。今のところ、私の電話番号を知っているものは学内でほとんどいないであろう。

今日は隣の部屋のハンスが海外から帰ってきたことに加え、そのさらに隣の部屋の教授もオフィスに戻ってきたようだった。その方とはまだ挨拶ができていないが、彼らがオフィスに戻ってきたためか、これまでよりもオフィスが少し賑やかになったような気がする。もちろんそれでも極めて静かなことに変わりはないが、今までの妙に静か過ぎたのだ。

今日は一日中、ハイドンのピアノソナタをオフィスの中でかけていた。周りが静かな分、音量は部屋にいる私だけが聞こえる程度にしていた。私の隣の部屋、そしてさらに隣の部屋の教授が戻ってきたこともあってか、今日はオフィス内にオランダ語が飛び交うことが多かったように思う。

オフィスにいと、オランダ語を媒介にして英語脳が活性化され、オフィスにいる間は日本語で日記を書き留めようという意思は一切なくなっていた。米国で生活をしていた四年間は、日本語が活性化されないことを望んでいたのだが、今は少しばかり違う考え方と生活態度を持っている。今後日本を離れた生活が長くなるにつて、いかに日本語を涵養していくかが自分に課せられていることの

ように思う。日々の生活の中で本当に意識しなければ、日本語を鍛錬する機会というのはほとんどない。特に日本語を読む機会は乏しく、日本語を読もうとする意思はどんどんと薄れていく。

今はごく限られた限られた著者の日本語を読むことしかなく、しかもそれらは大抵数十年前に書かれたものである。自分が選んだ限られた和書に時々目を通すことと、日々日本語で日記を執筆することしか日本語を涵養する機会がない。しかし、それらがあることがせめてもの救いであり、むしろそれらさえあれば十分なのかもしれない。フローニンゲン:2018/2/16(金)22:02

No.769: Self-Esteem Needs

As Alfred Adler argues, our strongest needs are to feel secure in our self-esteem. To satisfy with our self-esteem, we feed on various types of symbols such as money and social status. Modern people are still at the developmental stage where they have to satiate self-esteem needs. I think that humans remain immature and poorly developed in that they still have to satisfy their self-esteem needs by socially constructed symbols. Groningen, 18:25, Sunday, 2/18/2018